

(令和2年6月07日)

< ワンポイントレッスン (理論・基礎知識) >
(ROE の展開式・その1)

ROE の展開式・その1

財務分析比率に、分母と分子に同じ勘定科目などを乗じ、組み合わせを変えることにより意味のある複数の財務分析比率に分解することがよくあります。下記は、一般的な展開式で ROE(自己資本経常利益率)に、売上高/売上高、総資本/総資本を乗じて組み合わせを変えたもので、結果、売上高経常利益率、総資本回転率、財務リバレッジ (自己資本比率の逆数) に分解となります。

売上高経常利益率は、どれだけ収益性の高い企業活動を行っているかの収益性・採算、総資本回転率は、投下した資本の何倍の売上を上げているか投下資本効率、財務リバレッジは他人資本をどの程度利用しているかなど、各々意味のある分析比率となっています。この段階で、ROE を三つの角度から評価できることになりました。また算出した財務分析比率を、時系列に並べれば、財務体質がどのように変化してきたのかを理解できるはずです。

なお、総資産回転率を売掛債権回転率や棚卸資産回転率など各資産の回転率に分解することができるなど、三比率共に更に細分化しますが、ここでは割愛です。

<ROE の展開式・その1>

$$\begin{aligned} \frac{\text{経常利益}}{\text{自己資本}} &= \frac{\text{経常利益}}{\text{自己資本}} \times \frac{\text{売上高}}{\text{売上高}} \times \frac{\text{総資本}}{\text{総資本}} \\ &= \frac{\text{経常利益}}{\text{売上高}} \times \frac{\text{売上高}}{\text{総資本}} \times \frac{\text{総資本}}{\text{自己資本}} \\ &= \left(\frac{\text{売上高}}{\text{経常利益率}} \right) \left(\frac{\text{総資本}}{\text{回転率}} \right) \left(\frac{\text{財務リバレッジ}}{\text{自己資本比率の逆数}} \right) \end{aligned}$$

このように分解すれば、何が要因で ROE が高いのか、低いのが理解でき、企業の財務体質に対する評価ができるようになります。他人資本が多く (自己資本が少ない) 中で、利益をあげている会社も ROE が高くなりますが、ROE の安定性に欠ける懸念があること、また売上高経常利益率が低い場合、景気の落込み時における負担が多くなる可能性があるなどです。